

ヨーロッパ縦断——吹雪と灼熱のブリュッセル流れ旅

荻野 アンナ

《国際死の舞踏学会》会員、荻野アンナです。皆さんお笑いになります、本当なんです。私が言う嘘に聞こえますし、《国際死の舞踏学会》という名称自体、怪しげなんですけれども、実際にそういう団体があるんです。今日の演題は「ヨーロッパ縦断——吹雪と灼熱のブリュッセル流れ旅」。吹雪と灼熱ですから、夏か冬だと思いでしょが、実は五月の末、正確には五月二十三日から六月二日までという旅に行つて参りました。勤務先の大学の学期中だったんですけれども、「死の舞踏とブリュッセルの研究」と称して、学校にはもつともらしい海外出張願いを出しまして。「ブリュッセルの〈死の勝利〉に見られる死の舞踏の影響を確認するための旅であり、また国際死の舞踏学会の会員との交流を現地です」などとつらつら書いて、「必ずやこの成果は授業に於いて役立つことと思われる」

と力説した書類を提出して、内心「やった！ 五月下旬の、一番氣候のいいヨーロッパで、珍しい壁画や風景を楽しみながら旅行ができるんだ」と思つて旅立ちました。しかし世の中、そんなに甘くはないです。特にこの中でマスコミ関係の仕事を志望されている方には申し上げておきまされども、テレビ局の仕事というのは、一に体力、二に体力、三四がなくて五に体力。そんなテレビ局の人間に「体力には自信があります」などと言つてしまつた私がばかよ。と言いますのも実は、今回の旅はBSの「素晴らしき地球の旅」で企画されたものなんです。「素晴らしき地球の旅」という題名は素晴らしいんですけれども、実質は「嘆かわしき疲労困憊の旅」でした。出発の日夕方まで授業をやり、夜行の飛行機で朝の四時にパリ到着、午前中はパリ取材、午後はシャルトルの取材をして、その日の夜

パリに泊まれると思つたら「予定が変わりました」と言われて、夜の空港からスイスのバーゼル行きの飛行機に乗って、翌朝の七時半にはバーゼル美術館で取材開始。こんなのが十日間続きました。スイスの後はイタリアなんです。が、あちらではこれも食べたい、あれも食べたいと夢ふくらませていました。ところが来る日も来る日もサンドイッチばかり。私イタリア語できないんですけれども、「パニーノ」サンドイッチという単語だけは徹底的に覚えてしまいましたね。ロケバスの運転手さんなんか二日目にして「Mamma Mia!」—「Oh, my mother!」ですよ—「またパニーノかい!」と叫んでいたようです。言葉はわからないですけども。そういう過酷な旅でして、夜は夜で空港のセルフ・サービスで、学食のごはんのようなものを涙といっしょにかき込んだ、というわけです。

なんで灼熱かつ吹雪かと言いますと、五月下旬ですよ、一番いい季節です、ヨーロッパ。ところが現地で足取りを追った画家ブリューゲルは、ネーデルラント、今で言うオランダの生まれですが、その後、修行のためにイタリアに旅行しています。スイスからアルプスを越えて北イタリアへ。そのアルプス越えを追体験しました。アルプスは雪が残っているとは聞きましたけど、残雪というより現役で降っていました。一晩で二十センチです。その翌朝、鼻

も凍りそうな寒さの中で取材をしてふもとに降りて、イタリア国境に近づきますともう半袖。翌日シシリア島に飛んだら、真夏の太陽でした。春夏秋冬を一週間で体験するお徳用の旅。委細は、ちよつと恥づかしい話も含めて、後でお話しましょう。

牛に引かれて善光寺参りという表現が日本語にはありませんけれど、ブリューゲルにひかれてフランス・スイス・イタリアと巡ったわけですが、そもそもブリューゲルのどんな絵がきっかけになったのか、今日はビジュアル付きですから、まず見て頂こうと思います。

ブリューゲルは一五二五年頃に生まれたんじゃないか、と言われています。当時は生没年の記録が曖昧な例が多く、彼の場合も一五五一年に画家組合に入会したという記録が残っているので、そこから逆算して二五年ぐらいに生まれたんだろう、と。一人前の絵描きとなったところで、当時の慣習に従って、修行の旅でイタリアへ。一五五一年の秋か五年の春のことです。その成果が、どうやらこれらしいのです。これは「死の勝利」という題名の絵です。のっけから不気味な絵なんですけれども、これが擬人化された死です。この骸骨が大鎌をふるって、生きている人間を死の国へ連れていく。鎌を振りながら死の世界へカマン、カマンなんて（笑）。

ちょうど物干し竿のようなものがきましたので、これで指します。すみませんね、比喩が悪くて。でもしみじみした感じでいいですよ。大根坂を登ってキャンパスに来て、物干し竿使って講演をしている私。

みなさん、ケタケタ笑っていますが、笑っている場合ではありませんね、死が襲いかかっておりますね。死の乗っている馬も、完全に骸骨の状態になっています。そして部下の骸骨の大群。今度は襲われている人間の方なんですけれども、ご覧下さい。こういう道化の格好をした人間もいれば、貴婦人らしき服装の女性もいる。貴族の宴会が襲われている一方で、庶民的な階層の人達も除外されていない、ということですね。こちらでは騎士が犠牲になっています。細部をこうやって検証していきますとね、大人、子供、男女、職業の別がないんですね。人類のあらゆる階層が死の襲撃を受け、死に神がこうやって喉をかききつたり、水に沈めたり、あるいは首を吊つたり、矢を射たり、さまざまな処刑方法で、死の国に連れていく。農民画家と言われるブリュッセルのイメージからすると、不気味な絵ではあるわけです。彼の、これからお見せする多様な作品群の中でも、かなり特徴のある、雰囲気異なつた絵で、恐ろしい画面ではありますが、だからと言ってこれを掛けていると夜中にうなされるという、そういう恐がり方を、



ブリュッセル「死の勝利」

当時の人々はしなかつたんじゃないか。

現在のわれわれとは異なる死に対する考え方を、彼の同時代人は持っていたかもしれない。中世・ルネサンスを研究する立場としては、そのところが気になります。そこで画家と受け手が共有した「場」に、自分も身を置いてみようということで、旅に出たわけですけど、なぜイタリアの、それもシシリアまで行ったかと言いますと、先述のように、一五五一年から五二年にこの絵描きはイタリアに旅行しています。イタリアでは、骸骨馬にまたがった「死」が人間を襲うという、「死の勝利」のテーマが、十五世紀頃から現れていた。このテーマで描かれた先行作品をプリューゲルは見たんじゃないか、と。彼はイタリア本土のついでに、シシリア島まで足を伸ばした可能性がありますが。どうもシシリアらしき風景が絵に出てくるんです。そしてそのシシリアには、十五世紀に描かれた「死の勝利」という、同じ題名の絵がある。で、是非見てみようということになったんです。

ところで、先程述べた、あらゆる階層の人間が死をまぬがれ得ないという考え方は、「死の勝利」の他にも、「死の舞踏」や「三人の死者と三人の生者の対話」という類似したテーマを生んでいます。中世末期からルネサンスにおける死は、だいたい、この三つのテーマにおいてヴィジュアル

ル化されています。

まとめますと、イタリア中心に発達したのが「死の勝利」というテーマ。更にフランスから発して、イタリア北部やスイスなど、中部から北部ヨーロッパに伝播した「死の舞踏」、これは踊りながら人間が死の世界へ誘われていくんです。もつと遡って、十三世紀ぐらいから見られるのが「三人の死者と三人の生者の対話」。三人の貴族の若者達が「森へ行きましょう(歌)」と、狩猟に行くんですね。そして深い森の奥で三つの棺桶を見つける。中に死体が並んでいるんですけど、それがまた、死んだばかり、腐りかけ、完全に骨、という、死の三段階が揃っている。

「きゃー恐ろしい」と覗きこめば、なんと、三つの死体は自分達の死後の姿でありました。お前達は遊び惚けているけど、将来はこんな風になるんだから、今のうちに徳の高い生活をしろよ、という教訓を得て、三人は改心し、生活を改める。以上「死の勝利」、「死の舞踏」、「死者と生者の対話」、この三つが死を巡る、主だったテーマです。

さて、プリューゲルの絵に戻りましょう。「死の勝利」が、この絵の主たるテーマであることは、題名で既に明らかですが、あらゆる階層の人々が、死神に誘われてあの世に行くという点では「死の舞踏」とも重なります。この「死の勝利」と「死の舞踏」という二つのテーマを追っ

て、フランス・スイス・イタリアを巡った道程を、皆さんともう一度辿ってみることにします。その前に、ブリュージュとはいかなる画家であったのか、主要な作品をお見せ致しましょう。そもそも私がブリュージュにひかれたきっかけは、この「バベルの塔」という絵です。フランス留学中に、旅行先のロッテルダム美術館で出会いました。市内を観光していたら、ちょうど雨が降りだしたもので、目の前の美術館にふと入ってみる気になった。入館料タダというのも大きかったです。日本の展覧会にヨーロッパの古典名画が来ると、素晴らしいと思つてどんな絵でも舐めるように見るわけですけど、あちらに行きますと、同じレベルのものがごろごろしていて、食傷気味になつたりもします。オランダの美術館で主流を占めるのは、落ちついた色調の風景画や、花瓶からあふれんばかりの花を緻密に描写した静物画。またか、という感じで眺めていると、ありがちな絵の大群の中にあつて、ギラリと目を射る小品があるではないですか。こうやつて拡大すると迫力があります。が、実物は極く小さいんです。これぐらいのもんです。その小品が、よほど大きな絵に囲まれているのに、その壁面で、唯一びかびか光つて見えました。これも画家のイタリア修業の産物でして、ローマのコロッセウムにインスピレーションを受けて描いたということです。コロッセウムの

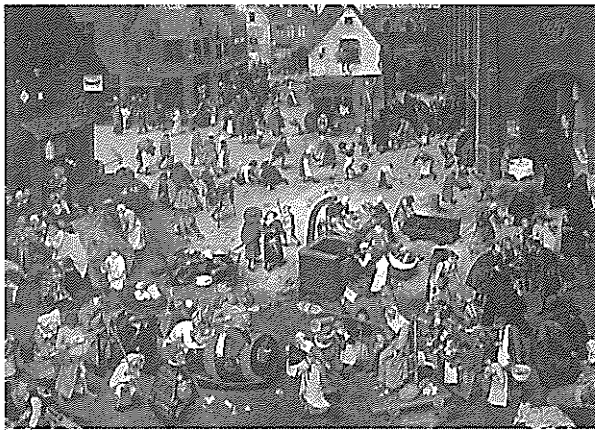
単なる模写ではなくて、当時知り得たあらゆる建築技法とスタイルを、ばーんとこの塔ひとつにぶち込んだらしいんです。ただ、そういう建築に対する関心だけでは説明のつかない、迫力があるんですよ。ご覧下さい、この巨大なバベルの塔、天に届けと建てている塔の周辺に、何やら蟻のようなものがうごめいてますよね。これが馬と人間なんです。こんなにも小さな存在でありながら、かくも偉大なものを建てて人間の知性は素晴らしい、と思うと同時に、結局天に向かう塔は、人間の虚栄心が災いして、建設中ばで挫折する。見るだにこれ、完成するという感じがしないですよ、ね、不吉な暗雲が立ちこめていて。この塔が内包しているのは、つまりは人間の可能性とその限界ですね。塔の形を借りたそういう非常に深い作品じゃないか、と感じ入つて、それからブリュージュに特別な興味を抱くようになりました。

このバベルを、ブリュージュは二回描いています。それだけ思い入れの深いテーマなのでしょう。これはウィーン的美術史美術館の方にある、もう一点ですけれど、これはもつと人物がはつきり描かれて、王様らしき人物が指揮を取っています。やはり建築物の壮大に対する人間の微少が、印象的ですよね。

次なる作品は「四旬節と謝肉祭の闘い」です。

この人物が謝肉祭、つまりカーニバルを擬人化したものです。で、こちらが四旬節の精進潔斎。キリスト教の行事をご存知の方には、一目瞭然のテーマなんですが、曆の上では、まず謝肉祭が来ます。二月上旬の火曜日にあたっていて、肉食をするので「肉の火曜日」と呼ばれています。が、この時にとっておきの豚を屠り、一年分のご馳走をたらふく食べ、散々飲めや歌えやで大騒ぎをした翌日の水曜日が「灰の水曜日」。「肉の火曜日」から一転して「灰の水曜日」になりまして、その後が四旬節です。精進潔斎に励み、粗食に甘んじなければならぬ。ですから、太鼓腹のカーニバルが串刺しの焼き肉を手をしているのに対して、四旬節の方は、いかにもまずそうな干しにしんを板にのせて持っています。彼ががりがりに痩せているのも故なきことではなくて、精進潔斎の期間は、約一月くらい続きます。干魚とか、野菜とか、ごく貧しい食べ物で満足しなければならなかった。そういう期間が過ぎますと、ちょうど水ぬるむ季節になって、復活祭が到来します。春を祝う土着の祭りがキリスト教化し、死せるキリストの復活をことほぐ習わしとなったものです。さて改めて画面に注目しますと、先程の「死の勝利」に似た箇所があることに気がきます。老若男女を問わず、あらゆる階層の人々が画面を埋めつくしていますね。女性、男性、そして

おなじみの道化。子ども達もいます。体の不自由な人もいます。人間の条件を、多様なレベルで体現する人々が、前面のカーニバルと精進潔斎の戦いを取り巻いている。当時、つまり十六世紀は、人文主義者 humanist 達が活躍した時期で、彼らは暗黒の中世、——中世はそれほど暗黒の時代ではなかった、というのが今の定説ですが——過去の軛か



ブリュゲル「四旬節と謝肉祭の闘い」

ら抜けて光のルネサンスを自分達が実現していくんだ、という意欲に燃えていました。ルネサンスとは再生、文芸の復興、具体的に古今のあらゆる知識を吸収し、人間の知の可能性に挑戦する動きです。ブリュッセルも画家ではありますけれども、そういう humanist 的な側面を持つていますので、世界のあらゆる事象を自分の絵に閉じこめるべく努めた。そこで本来なら複数の絵を成すに足りる多様なディテールが一つの絵に盛りこまれた、という説があります。結果として、絵に焦点がないんですよ。ばらばらなんです。ばらばらなんです。これは私の勝手な説、萩野説なんです。画面のこの辺りが妙に明るくて、その明るさの中の道化の後ろ姿が何やら気になるんです。目が自然とここに吸い寄せられていく。この道化が、実は作品の核ではないでしょうか。彼のまわりでは、魚を売ったり、議論をしたり、物乞いをしたり、さまざまな生活の情景が繰り開けられていますけれども、こうして見ると人間のあらゆる活動が、叡知の成果というよりは、むしろこの道化の後ろ姿に収斂していくような、愚かしさの産物なのではないか、そう思えてきます。といいますのも、十六世紀に特有の人間の把え方に、この絵は立脚しているからなんです。当時は、「人間はみんな○○だ」この「○○」というところ

ろに二つの単語が当てはまるんですね。一つは「人間はみんな愚者」。中には賢い人もいるし、アホと呼ばれる人もいます。さまざまな人がいるけれども、賢く見える人でも、例えばお金に執着するとか、女に狂うとか、心のどこかに一種の狂気を持つている。結局人間みな愚か、というテーマは文学にも親しいものです。詳しく言うと、一四八九年に出版されたセバスチャン・ブランドの『愚者の船』。これは世の中のあらゆる愚か者を、船に乗せて愚者の団に送り出す、という趣向の風刺詩です。もつと有名な作品では、一五〇九年、エラスムスの『痴愚神礼讃』。私が専門としているラブレーム、『第三之書』の中でアホ褒めをしています。ですから「愚か」というキーワードは、十六世紀人が「人間」というものを、一つの大きな括弧でくくろうとした時に見つけた単語なんです。もう一つあります。「死」です。当然ですが「人間は皆、死ぬ」。皇帝であるうが、物乞いであろうが、死を前にすれば平等です。愚かしさと死を人類の共通項と見做す考え方が十六世紀にはあった、ということ。その一例として、この絵を取り上げてみました。

以上の作品は、一般的なブリュッセル像からすれば、少しズレたものばかりです。彼は長年にわたって「農民の画家」という受け取られ方をしてきました。農民の生活情景

を巧みに描いた絵描き、というのが、彼の我々に見せる最初の顔なんです。例えばこの絵、《農民の結婚式》です。これが花嫁、りんごの頬をしています。どんどん新しいご馳走の皿が到着していますが、そのご馳走と言うのが見るからに素朴な料理ばかり。一見牧歌的なこの絵にも、謎が一つあるんです。花嫁はいるが、肝心の花婿がいない。こちらの二人は両親でしょうか、花婿としては老けていますし。謎の花婿、というのがこの絵の場合、議論の対象になるんです。これにも荻野説がありまして。不在の花婿とは、実は先程の《四旬節とカーニバルの戦い》の道化なのではないか、と。そう考えると二つの絵が一つにつながっておもしろい。それはさておき、これが農民画家ブリュゲルというイメージにふさわしい絵です。彼は確かにこういう農民画家としての側面を持つてはいたけれども、それが全てではなかった。

これは《ネーデルランドの諺》と言いまして、やはり焦点のない細部ばかりで出来たような絵。日本の例で言えば、《豚に真珠》という諺をあらわすのに、豚と真珠を同一の画面に描いたり、《猫に小判》ならそのものズバリ、小判をくわえた猫が出てきたり。同様のやり方で、ネーデルランド地方の諺を、一つ一つヴィジュアル化して同一の画面にまとめあげた作品です。

本題に戻るためにも、次に参りましょう。さあ、これがブリュゲルの残したアルプス風景です。彼はアルプス旅行から帰ると、画商に求められて、大量のアルプス風景の版画を残すんですが、その中の一枚です。

どうでしょうか、先程の《バベルの塔》に少し似ていると思われませんか？ こちらは自然が作った景観ですけども、巨大な岩の塊、それに比して、例えばこの鳥の小さなこと。大宇宙の中に、点景として、小宇宙つまり生命が散らばっている。後でビデオで本物のアルプスの情景を見せてみますが、この幻想的な版画が実はきわめて写実的であることがお分かり頂けると思います。空には似たようなかんじの鳥まで飛んでいるんです。どうぞ、お楽しみに。

以上、ブリュゲル早わかりでした。彼の《死の勝利》がきっかけとなった、旅の話に移りましょう。《死の勝利》というのはイタリアのテーマですので、イタリアに行かないと出会えないわけです。それに対して、《死の舞踏》、フランス語で *danse macabre* ですが、こちらの方は、主にフランスやスイスに残っていますので、まずはフランスに突撃、というわけで。いよいよビデオの方を……。今日は機械に弱い荻野が、必死の思いでビデオを操作しております。これが、アルプスの雪山ですね。違いますか（笑）。

最初に出てくるのは……、パリです。やつパリ、とか

(笑)。荻野がシャンゼリゼを歩いております。シャンゼリゼは主題と関係ありません。ディレクターの趣味です。次に行ったのがフォラム・デ・アール。巨大なショッピング・センターなんですけれども、ここで、私は道行く人にインタビュを試みました。たむろしている若者達に「ここに前、何があったか知ってる？」というのと、「さあ？」と首を傾げます。かなり物知りの人でも「こつて前はレ・アール (Les Halles)、つまり中央市場があったんでしょ」と答えるのがせいぜいでした。かなりの人数に聞いてみましたが、この明るい現シヨッピング・センター、元中央市場が、そもそもは墓地だった、ということを知っていたのは、一人だけでした。既に、十世紀には墓地として機能していたんですが、その名もサン・ジノサン、聖なる嬰兒の墓地というんです。ここは、土質が特殊なために、遺体を埋めると、数日でほとんど骨になってしまった、といひます。骨となった遺体が山のように積み上げられて壁を成す、という恐ろしい場所。同時にそこには市が出ていて、肉も売られていたつていうから。笑い事じゃないですよ、本当にもう。墓地というのは、そういう特殊な場所だったらしいですね。多種多様な人々の集まれる場所、集会場であり、市場でもあり、大道芸人達がパフォーマンスをしていたりもする。そのせいでしょうか、今だにこのレ・

アールでは大道芸人をよく見かけます。それにしても墓地から中央市場、そしてシヨッピング・センター、思わぬ変身をとげた場所ではありません。

なぜここが、ブリューゲル巡礼の最初に選ばれたか。サン・ジノサン墓地には十二世紀に教会堂が建ち、その回廊には「ダンマカ」が描かれていたんです。「死の舞踏」のフランス語はダンス・マカブル。長くて言にくいので、ロケ中に、いつの間にか「ダンマカ」と呼ぶようになっていまして。木村拓哉が「キムタク」になるのと同じですね。で、これからは「ダンマカ」と略させてもらいます。サン・ジノサンの「ダンマカ」は一四二五年作です。これが、大いに流行るんです。そんな不気味な壁画に人気が出るのかと、ぎくつとされるかも知れませんが、当時は、生々しい死の図像に人々が共感するような素地がありまして、私は不幸の三点セットで言っているんですけれども、戦争と飢餓とペスト。ペストは特に一三四八年の大流行が、歴史的な爪痕を残したのですが、他にもかなりの頻度でペストの襲来があった。酷い時には、村によっては人口が一挙に三分の一になったといひます。おまけに百年戦争も末期に至つて、人心は荒廃していた。せつかく農民が種を蒔いても、実つた麦は戦火で焼かれたり、兵士に略奪されたり。そして飢え。この戦争・ペスト・飢えという

不幸の三点セットが庶民の日常だったわけですね。そんな訳で、死は抽象的な概念というよりは恐ろしい隣人であり、日々、手に触れられる所で待ち伏せしていた。そういう状況にある人間には、どうしても慰めが必要になります。その慰めとして描かれたのが「ダンマカ」です。なぜ死神が主役の絵が慰めになるかは、映像を追っていくとわかります。

この絵は墓地だった時の情景ですね。こういう、実は場所だった。骨がそのまま散らばり、壁と積まれている状態です。で、この泉は、サンIIジノサンの泉と言っています、墓地を偲ぶよすがとして、唯一現存しています。恋人たちの集う明るい泉が、実はそういう恐ろしい場所だったんです。

これはですね、トランジと言いついて、墓石の上の、死者の裸体立像、ルーブル美術館収蔵のもので、自分の死後の姿をリアルに彫刻させて墓の一部にする、という習わしからも、死がいかにかに当時の人々の心を捕らえていたかがわかります。こういう骸骨そのものの像の他にも、生前の姿で横たわる像を彫ってもらい、その下や横に、今度は骸骨寸前になった姿を沿わせる趣向もありました。他にも、ほとんど骸骨になりかけた自分の死骸の顔の所に、蝦蟇が二匹乗っていたり、体を虫に食われていたり。なんで自分

の死後の恐ろしい姿をさらすかと言いますと、絵や彫刻の中で虫に食われることで、現世で犯した罪に対する悔後の情を表しているんです。そういうことなら、なるべく虫の数を多くした方が、悔い改めている感じがよく出ますから。そこで身の毛もよだつ像を作って、自分の墓に飾る。

さて、ここで突然本が出てきます。一四二五年にサンIIジノサン墓地の回廊に、〈死の舞踏〉「ダンマカ」が描かれたわけですが、それが六十年後の一四八五年に、本になります。これです。この本がまた、当時としては、今でいうベストセラーになったと言っているでしょう。どういう物か、と言うと、このようにページの上半分に木版画があり、下がテキストになっています。テキスト部分は、実際の壁画にも書かれていて、それを写したものです。上の絵も壁画を模写したのですが、原画の壁画は絵巻物のように細長いんです。その長いのを本にするためには区切らなければならぬので、場面ごとにページが変わっています。

冒頭で死神が、「さあこれから死のダンスですよ」と言わんばかりに音楽を奏でています。その次に出てくるのが誰だと思いませんか？ ローマ教皇です。教皇の次は皇帝なんです。が、まず教皇なんですね。何せキリスト教世界で最高の権威ですから。つまり、とりあえず一番偉い人から死

の国に行つてもらおう、という発想なんです。死の舞踏の場合、死神一人に人間一人でペアになります。そのペアカップルがどんどん踊りながら、死の国に行くわけですけれども、先頭は必ず教皇です。教皇と死神のカップルの下にはちゃんと教皇の台詞が付いていて、「私はキリスト教世界で一番偉いのに死ななきゃいけないのか？ ただの人間みたいには死ぬのは嫌だけど、やっぱ死神よ、おまえはキョーコーに連れて行くのか(笑)」というの私はかなり作っていますが、大体その手のことが書いてあります。教皇の次が皇帝。その次は枢機卿、それから貴族階級というふうに続きます。こうして「ダンマカ」を見ていくと、世界の階級制度が手に取るようにわかります。この本の末尾は「いたいけな赤ん坊。だいたい一番最後に出てくるのは、赤ん坊でなければユダヤ人が多いです。当時はユダヤ人迫害がひどかった時代で、身分制度に従つて一番偉い人から始まった死の舞踏が、最後は一番下に見られていたユダヤ人で終わっている。矛盾しているようですが、「ダンマカ」は死を前にした平等思想の表明であると同時に、揺るぎのない身分制度の存在をわれわれに知らしめる教材でもあるわけです。

さてお次は、田舎の上に「ド」が付きそうな、のんびりした景色ですけども、これはシャルトル近郊のメレイ・

ル・グルネ。村の小さな教会に、十五世紀の「ダンマカ」壁画が残されています。ところでフランスの城では、よく *Son et lumière*、光と音のスペクタクルなんです、これをやります。夜になると城を下からライトアップして、BGM付きでムードを出す。なんとこの村では、ダンス・マカブルの壁画で光と音のスペクタクルを始めちゃいます。で、「ダンマカ」で村興し、という感じです。

「はいどうぞ」と、私を教会に招き入れてくれているご婦人、彼女は「死の舞踏学会」の立役者なんです、そのお話は後ほど。この教会の壁画が発見されたのはほんの数年前のこと。これが問題の絵です。ただし十五世紀に描かれた後、何度も修復されていますので、わりと新しい手も入っています。どうでしょうか、やはり身分の高い順から死が連れて行っていますね。この絵は数年前に発見された、と言いましたけど、上に漆喰が塗られていたために、それまでは絵の存在を誰も知らなかった。ところが下からこういうものが顔を覗かせていたということで、慌てて上の漆喰をとって、絵を出したんです。

《ビデオ》「これが一番気に入りました。枢機卿を連れていく骸骨ですけども、こうやって手を繋ぎながら、表情は「やっただぜ！」という感じ。ほとんどひょうきんと言つてもいいような表情をしていますね。全体に骸骨達の方

が、生き生きとした、人間らしい顔をしている。この骸骨の方が確固たる現実であり、逆に現世の方がはかない幻的なんだ、という気が、描いている人はあつたんじやないでしょうか。写し世という表現からは日本的な諸行無常を連想しがちですけれども、この場合は死という、ものすごくリアルなものがあつて、それは全てを破壊してしまうけれども、そういうすさまじい現実に裏打ちされているからこそ、我々はむなし日常を、リアルなものとして生きるこゝとが出来る。そういう非常にポジティブな意味を、この骸骨達は持つていたんじゃないでしょうか。」

ビデオには入っていないエピソードをお話ししましょう。絵は教会の壁の下に隠れていたわけですが、隠れていたのを出す時に何を使つたか。実はパンの身の部分なんです。デッサンの時に消しゴム代わりに、パンをこねて用いますが、なんと、それがこういうフレスコ画の場合も有効です。この教会でもパンの身をトラック何台分だけ使つたと言います。

次に、先程案内してくれた婦人ですが、彼女がそもそも教会堂でダンス・マカブルを発見した張本人です。この発見がきっかけとなり、以後ヨーロッパ中のダンス・マカブルを探訪して、現地の人と連絡を取り、それがやがては「死の舞踏学会」という組織に育つていったということ

す。

では何故彼女が教会堂と関わりを持つに至つたか、といえますと、教会堂の隣の司祭館が、彼女と夫の住居なんです。崩壊寸前の司祭館を買い取り、夫婦の日曜大工で十年かけて修復しながら住んでいます。それがきっかけでダンス・マカブルに興味を持ち、ヨーロッパをキャンピング・カーで巡るダンマカ探しの旅を繰り返しました。ダンマカは北の方に集中しているので、冬は厳しい旅になります。とある寒い晩、夫はキャンピング・カーの中で眼鏡を取つて、窓際に置いて寝ました。朝起きて眼鏡を取ろうとしたら取れない。なんと、眼鏡と窓が合体して凍りついていた。と、いうような思いをしてこのご夫婦は、ダンス・マカブルを今に伝えようと努力しておられます。

次はちよつとお見せするだけです。フィエルテ・ル・ピエールという、フランスの地方の町にある、ダンス・マカブルです。

さあ、今度フランスを離れてスイスのバーゼルに飛びます。この街は、先程も申しましたように、『愚者の船』が出版された、人文主義者ゆかりの街です。

これはバーゼル美術館の内部です。ホルバインの作品を二点、お見せします。まずはユマニストの雄、『痴愚神礼讚』の作者、エラスムスの肖像画です。そしてこれはへ死

せるキリストの像。死後硬直も生々しい死の描写をおこなったこの画家が活躍したのは、十五世紀後半から十六世紀にかけて。ルネサンスの一面面がうかがわれます。収蔵作品の中にグリーン、この人は巨匠デューラーの弟子です。が、彼の手になる「死と乙女」もあります。

《ビデオ・「死と人間のカッブル」という点ではダンス・マカブルに連なるものと言えましょう。ただ若々しい肉体を持った乙女、その肉体表現の素晴らしさがあって、対する死の醜さ、腐敗・破壊の恐ろしさが、鮮やかなコントラストを成して描かれている。死と人間のカッブルという枠を超えて、肉体の開花と凋落を描くこの作品は、ルネサンスと中世のカッブル、非常に奇妙な、そしてまた珍しいカッブル、という気がしなくもありません。》

なんで、ルネサンスと中世のカッブルなのか。中世のテーマである死の舞踏を踏まえながらも、その生々しい肉体表現、生の輝きの表現に、人間を中心として旧来の世界観を組み立て直したルネサンスの息吹を感じます。肉体表現はルネサンス、テーマは中世というわけです。

さてこのバーゼル美術館、先程のホルバインやグリーン作品のみならず、ホルバインの木版画付きで一五三八年に出版された「死の舞踏」も収蔵されています。更に、この街には、かつては死の舞踏が壁画に描かれていた、とい

う過去があります。今でもトーテンタンツという名称の通りがありますが、トーテンタンツとはドイツ語で死の舞踏という意味、なんとこの町名は「死の舞踏町」なんです。このトーテンタンツ通りに面して昔は修道院がありました。その壁面にはダンス・マカブルが描かれていました。やがて取り壊されたんですが、その理由がふるといいます。壁のせいで日当たりが悪い、と。中世の、不幸の三点セットに苦しめられていた時代には、このタイプの作品を前にすると、「こうして人みな死ぬのだから、運命として受け入れねば」と納得して、それが救いになっていくんですけど、十六世紀から十七世紀という風に時代が下りますと、ただ単に不気味な絵と見做されて、取り壊されたり、塗りつぶされたり、極端な場合は日当たりが問題になったり。ですから当時流行った割には、現在残っている壁画が少ないんです。さて先程のトーテンタンツ町の壁画ですが、壊された際に出た破片の一部が、現在美術館に収蔵されています。絵がもつたいないからと、持ち帰った人もあった、ということ。ご覧下さい、残されている破片はすべて死とペアになっている人物を描いたものです。骸骨のほうの破片を持って帰る人はいなかった、という事実が、近代のメンタリティを見事にあらわしています。

同じバーゼルの、これは民家の壁です。こうやって自宅

の壁にダンス・マカブルを描いている人がいるんですね。現在の家主は二代目の所有者でして、描かせたのは一代目の人とのことでした。中世末期に流布した後は、近代なるに従って、不気味なテーマとして嫌われた死の舞踏ですが、今世紀に入るとこうしてまた、家の壁を飾ったりするようにになりました。死に対する考え方が、それだけ変わってくるんですね。

次はルツェルンというスイスの町ですが、この町は、古い木橋で有名です。屋根付きの橋なんです、この切妻部分にダンス・マカブルが描かれています。十七世紀の作品ですから、このテーマとしては後期のものに属します。実は町には木橋が二つありまして、観光名所になっていく。この橋には、町の歴史が描かれています。これはおもしろい造りになっていまして、橋を渡るに従って、時代が下っていったり、上っていったり。いわば橋ごとタイムトンネルになっていくわけです。一歩歩く毎に、絵が替わり、時代が替わっていく。こちらは単なる歴史画なんです、もう一本橋があります。町外れの寂しい場所であり、おまけに描かれているのがダンス・マカブルなんで、訪れる人は稀です。

これは通常の死の舞踏のような横長の絵巻物方式ではなくて、場面ごとに切り離され独立しています。橋に沿って

各場面が死のテーマを繰り返しているわけです。一緒にいる女性は土地のガイドのジョジアヌさん。この人がもう、うるさいほどにしゃべりまくるんです。で、肝心な事を聞くと、例えば「この橋に絵は何枚あるんですか？」と聞いてみたら、「ちよつと待て」。で、やおら「ひー、ふー、みー、よ」と数え始めて。

この人が非常にいい事を言っていました。遠い時代に描かれたものではあるが、つらい時、苦しい時に眺めると、人間が死すべき運命であることに思い巡らせて、何らかの慰めにはなる。橋を渡りながら、子供達にこれを見せれば、さり気なく人間の運命を教える契機になる。その意味で現代人にとっても意義のある作品、と言っていました。十七世紀の作品なので、かなり近代絵画に近いですが、描き方が。服装も時代相応のものになっていきます。それぞれの絵には、情景に合わせた詩文が添えられています。例えば王后と死のカップルには、「王様のお后だったのに、みんなに見捨てられて一人で死んで行く」といった内容のものが付いている。貴婦人も庶民も、死を前にした孤独は同じ。身につまされると、ガイドのジョジアヌさんもしみりしていました。

スイスもバーゼル、ルツェルンと来まして、これからのよいよアルプス越えです。

アンデルマツトという駅で降り立ち、宿の主人の車で峠のホテルまで、ずんずん登っていききました。九十九折を、何度となく危ういカーブを切りながら登りつめるんですが、恐ろしい事にガードレールが無いんです。

運転中の御主人にこわごわ聞いてみました。さぞや事故が、多いんでしょうね。

「やあ、年に二、三回だよ。時々クラッシュがあるけどね」

「クラッシュ」と言いつつ、ハンドルから両手を離して、衝突のジェスチャーをしてみせる。冷や汗ものでした。

着いた時のみぞれ混じりの雨が、夜には吹雪となって、一夜明けると、一面の銀世界でした。一夜にして二十センチの積雪。おまけにまだ吹雪いている。これでは撮影ができません。スタッフは青ざめていました。宿の主人の雪かきを見ていてつい、その気になりました。作ったのが死の舞踏に困んだトータンタンツ雪だるま。一応骸骨の雪だるまにしてみました。骸骨というのは意外と雪だるまにするのが大変なんです。だるまっていうぐらいで、丸々としていなければいけないのに、骸骨は痩せていますからね。

昼近く、ようやく小降りになったところで、いよいよ出発です。峠に立ち、その眺望を、ブリュッセルのアルプス

風景に重ね合わせて、感想を述べることになっていました。いざ車から降りてみると、言語を絶する寒さです。持っている物を全部着ても、まだまだ寒い。「ブリュッセルそのままの景色ですね」と感動と共に語る場面なんです。この時身につけていたのは、春物のコート一枚と、セーター二枚重ねとパンタロン。自分でバラしてしまいが、パンタロンの下にはストッキングと、プロデューサーの男物のパッチを重ね履きしています。問題は足先。気楽にパンプスで来てしまったので、芯まで凍えてしまいました。そしたら、コーデイナーの女性が気の利く人で、こんなものがありますよ、と出してきたのが軍手です。軍手をソックス代わりに履きました。ちゃんと記念写真を撮ってありますから、懇親会の時に、見たい人にはこっそりお見せ致します。

ではアルプス風景に戻ります。こうして版画と実写を比べると、改めてブリュッセルの緻密なりリズムに驚かされます。画家はアルプスの山という山、岩という岩を疊んで靴に入れて、ネーデルランドに持ち帰った、と当時の人に言われた程、リアルに情景を再現しています。ただ、この素晴らしい景色にも、あれだけ死の舞踏を見た後では、不吉な影が射してくる。岩山が巨大な骸骨に、見えてくるんですね。こういう景色を越えてブリュッセルはイタリア

に行き、ペスト菌のほうは逆にイタリアから北に渡った、
というわけです。

次なる場面はコモです。コモには現在ダンス・マカブル
が残っていませんが、かつて描かれていた、という教会堂
が残っています。その教会堂に行く前に、別の教会で、キ
リストの生涯を二十一画面に分けて描いたフレスコ壁面を
見せてもらいました。その同じ教会に、こういう聖遺物も
置いてある。聖遺物と言われても、みなさんにはあまりイ
メージがわからないかも知れませんが、聖人のお骨や遺品
を、こうして豪華なガラスケースに保存して、信者の目に
晒すんです。信者のほうはそれを拝んでありがたく思う。
この教会にも、土地にゆかりのある聖人の横臥像が二つあ
りますが、像の下のケースにはお骨がいっぱい詰まってい
るんです。日本におけるキリスト教は精神的な面が強調さ
れがちですが、こういう具体的な信仰の形、聖者の骨を見
てありがたがるような、素朴な心性もまた、見落せない部
分ではあります。そういう具体性があつたからこそ、キリ
スト教は汎ヨーロッパ的な広がりを持てたのだと思いま
す。

コモには、ダンス・マカブルの大変な愛好家が住んでい
ます。いわばダンマカのオタク。ご覧のように、山のよう
なダンマカ資料に囲まれて暮らしています。ダンス・マカ

ブルは北方のテーマなわけですが、この人は宗教改革の伝
播と、ダンス・マカブルの伝播が、ある程度重なるんじや
ないか、というんです。宗教改革とひとつに重ね合わせる
のは危険なんですけれども、この見方にも一理あります。
丁度十五世紀末の同じ時期に、今までの宗教のあり方に疑
問を持つ知識人が一方では誕生し、他方庶民レベルでは、
死の前における平等主義が芽生えてきた。同じ地方で同時
進行だった、というのがおもしろいと思います。

さあ、これがダンマカの描かれていた教会です。ポロボ
口の廃屋で、びっくりされたでしょう。私も初めて知りま
したけど、ス・コンサクラートと言いまして、教会もまた
「廃業」する。この教会も、一八〇〇年代には廃業しまし
て、その後三階建ての倉庫に変身し、戦争中は屋根裏に鶏
を飼っていた、といえます。建物自体崩壊寸前で、入る際
に「中で何が起こつても自己責任です」という誓約書にサ
インさせられました。正面玄関のダンス・マカブルは消え
たものの、内部にはこういうフレスコ画、聖人の像ですよ
ね。その断片が残っていて、屋根のほつれの向こうには青
空が広がっている。教会といえども、不死じゃない、やが
ては死ぬ運命、と考えれば、この情景もまた死の舞踏の一
場面と言えるかもしれません。

さあ、そしてまた場所が変わります。これはイゼオの礼

拝堂にあるダンス・マカブルです。このフレスコ壁画のおもしろいところは、ダンス・マカブルが描かれた上に、また別の絵が塗られ、その上にまた別の絵、と、何と五層になっているんです。一層目は判然としないのですが、二層目には聖母像、三層目で聖人達が描かれて、四層目がダンス・マカブル。次が五層目、ということです。さてそのダンマカですが、骸骨の目の部分、お見えになりますでしょうか？ 本来は瞳が描いてあったのに、そこがえぐり取られているんです。当時ここは病院として利用されていたんですが、収容されていた病人からすると、骸骨の目が、じつと自分を見つめているように感じられたのでしょうか。あまりの不気味さに、骸骨の目を削ったと推測されます。時代が下るにつれ、ダンス・マカブルからメッセーじ性が失われ、単に不気味なものになってしまった、ということ

です。次はクルゾーネという、やはり北イタリアの町に行きます。この町にダンス・マカブル学会の本部があり、私もここで会員になりました。当時のディシプリニ、つまり鞭打ち行者たちの礼拝堂の、これが壁画です。上部が死の勝利のテーマで、その下がこうやってダンス・マカブルになっています。上下二段に別れているのを、一つの画面に合体させると、どうなるか。ビデオを聞いてみて下さい。

《ビデオ》「ブリュージュの「死の勝利」、題名が示すように死の勝利のテーマで描かれてはいますけども、同時にあらゆる階級の人々が、画面いっぱい散らばって死の餌食になっている点で、死の舞踏に近い感覚があります。

ここクルゾーネの壁画の下部の「死の舞踏」を、上部の「死の勝利」と合体させて、そこにブリュージュの個性をバラバラと振りかけたような感じでしょうか。あるいは、ドレッシングのように分離していた死の勝利と死の舞踏が、ブリュージュの技によって渾然一体となり、ひとつの味を形成しているという感じでしょうか。どうもそれだけじゃない気がします。実を言いますと、死の舞踏が描かれた壁の続きに、ラテン語の文句が書いてあります。

OMNES MORIMUR あらゆる人は、全ての人は死ぬ。聖書からの引用です。それに対してこちらの死の舞踏では、「死」のセリフが吹き出しになって出ているんですけれども、その中には、イタリア語で OGNA MOMO と書かれています。人は一人一人、別々に死ぬ。人という普遍が死ぬのではなく、私という個人が死ぬ。死が個人的なものになっています。聖書では人類に共通の、ジェネラルなものだった死ですが、この絵が描かれる頃には一人一人が、個人で引き受けるものになっていた。これは、中世が終わりを告げて、個人が人生を生き、謳歌し、死ぬという、ルネ

サンスが近づいているということなんでしようか。」

ブリューゲルの先駆作品ともいえるこの壁絵が描かれたのは、十五世紀末です。あらゆる人の体験するものだった死が、ここではすでに一人一人が引き受けるものになっていく。この死生観の推移はジャック・ル・ゴフ（中世史家）の指摘するところでもありません。時代の変化に対応し、個人として死を受けとめるために、一種のレッスンとしてこういう絵が描かれたのかもしれない。

さあ、ここがシシリア島、この灼熱の太陽が、旅の終着駅です。こちらがパレルモのスクラファーニ宮殿にあった「死の勝利」。どうでしょう。ブリューゲルと随分似ていますよね。彼がシシリアまで来ていたとすれば、確実にこの絵は目にしていたことでしょう。死が大鎌を振るって、馬も骸骨状態。犠牲者のほうは、帽子で判りますが、キリスト教の権力者。次は地上の権力者。貴族の女性達。そういった人々が、次々と死の矢に倒れている。面白いのは、こういう優雅な生活をしている人達が死に襲われているのを、隅のほうで病人たちが眺めているんです。スクラファーニ宮は病院に使われていたことがあり、おそらくこの絵を眺めながら病人たちは、「こういう高位高官でも死んで行かなければならないんだ」と思って、随分と慰められたのではないでしょう。

このシュロの木のある、宵空と太陽のシシリアで、最後にカプチン会の修道院に行きました。ここです、地下にこうして多数のミイラが眠っているんです。地質の関係で、死体が腐敗しないで、迅速にミイラ化するのだそうです。その状態で、山のように残っている。生前の服装を身につけたミイラたちに囲まれて、何を言っているのか、聴いてみて下さい。

《ビデオ》「微笑みかけているような顔もあれば、挑みかけるような顔、それから恥じらいの表情、そういった様々な表情が、殆ど饒舌と言える空間を作り上げているんですけれども、全体を死の静寂が満たしている。これがあからこそ、我々の生は、より一層輝かなければならぬい、いや輝かせなければいけない。だから *memento mori* というのは諸行無常というよりは、大変な生への執着なのかも知れないですね。」

memento mori は「死を忘れるな」という中世の言葉ですけれども、これを裏返せば、実は生への執着があらわれてくるのではないでしょう。 「死を忘れるな」と言っていて、死を強調する事で、「死ぬまでの人生を逆に輝かせようとしている。死を忘れるな、とは生を忘れるな、に他ならない。これが吹雪のアルプスから灼熱のシシリアまで、死のテーマを巡る旅をして、たどり着いた結論です。」